

福岡市博多区
下月隈宮ノ後遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第61集



1980

福岡市教育委員会



遺跡遠景（西方より）「月隈八幡宮」

加藤一純・鷹取局成著『筑前國福風土記附録』（50巻）

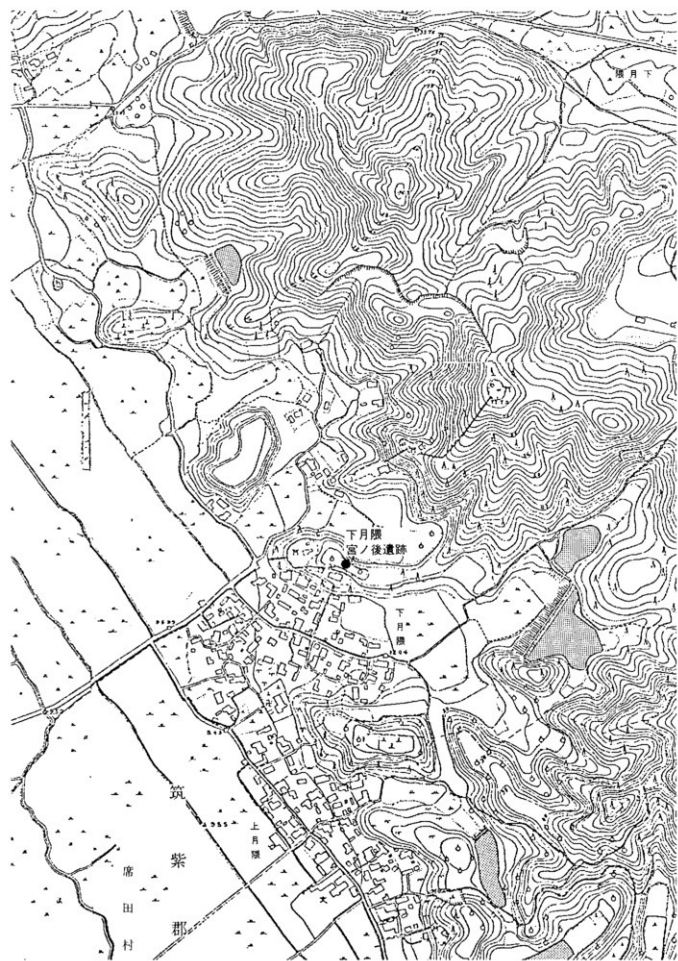
川添昭二校訂・福岡古文書を読む会

『筑前國福風土記附録』（上巻） 文献出版 1977年10月より

今から40年前のようす（縮尺 1/5,000）

●印が下月隈宮ノ後遺跡
（等高線の間隔は2メートル）





下月

下月 廣宮ノ後遺跡

下月 廣

上月 廣

筑紫郡

席田村

序 文

福岡平野の東部丘陵一帯は、国指定史跡金隈遺跡を始めとする弥生時代の共同墓地群の所在する丘陵として知られております。

本書は、昭和54年度に月隈丘陵で実施した埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものです。

本書が市民各位の文化財保護への関心を高める一助となれば幸いです。

調査にあたり、ご協力いただいた地元の方々を始め、関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和55年3月

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

凡 例

- 本書は、福岡市教育委員会が昭和54年度の国庫補助を受けて、1979年12月22日から発掘調査を実施している福岡市博多区大字下月隈字宮ノ後に位置する弥生時代の甕棺墓及び土塚墓の発掘調査概報（速報）である。
- 遺跡名は、現在の大字名、小字名を組み合わせて「^{しづつくまのしろ}下月隈宮ノ後遺跡」とする。
- 遺跡の発掘調査には、福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄、力武卓治、岡島洋一（事務担当）が当り、本書の執筆・編集は飛高憲雄・力武卓治が行なった。
- 遺跡の発掘調査及び本書の作成には、次の方々のご協力を得ました。氏名を記して感謝の意を表します。（敬称略）
荒津季治 岩永真弓 江越初代 河野徹也 関加代子 関政子 実淵栄治
鶴田サヨ子 中山政子 花畑照子 平島龍吉 安武裕子 山内タツ子
- 調査事務所の設置には、地元真教寺住職月江英海氏、光安禎太郎氏の絶大なるご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。
- なお本書裏見返しに掲載した遺跡分布図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を用いて作成し複製したものである。（承認番号）昭55九複、第84号

目 次

序 文

凡例 本文目次

第Ⅰ章	はじめに……………	(3)
第Ⅱ章	調査の記録……………	(5)
	1. 甕棺墓……………	(7)
	2. 土塚墓……………	(16)
第Ⅲ章	まとめ……………	(16)

第I章 はじめに

福岡平野の東を限る三郡山地より派生した大城山(標高410m)の山麓に、南東から北西に延びる古第三紀層によって形成された月隈丘陵がある。

現在、発掘調査中の「下月隈宮ノ後遺跡」は、この月隈丘陵のほぼ中央部で、福岡空港滑走路東南隅より約300m東に当り、県道板付空港線の月隈交差点から粕屋郡志免町へ抜ける道路に面した丘陵上に位置する。古地図を見ると、月隈丘陵には西へ延びる支丘が幾つもあり、支丘と支丘との間の谷には、出口に堤防を築いた用水池が見られる。当遺跡の立地する丘陵も長さ約300m、幅約50mで東から延びる一支丘であり、遺跡はその先端よりやや内側にある。その最先端には、江戸時代以来、月隈八幡宮が祀られ、境内と調査地点の間は約40mの幅で約6mの深さまで土取りがなされ、青空駐車場となっている。調査地点は、現在、標高23mであるが、今から40年前には約24mはあったようである。今回の当遺跡発掘調査のきっかけは、一昨年、土地所有者による土取り作業中、幾つかの甕棺が出土し、直ちに作業を中止して当文化課に通報されたことによる。月隈丘陵には、弥生時代の甕棺墓が数か所で確認されているが、何れの場合も主に土取り作業中の発見で、ほとんどの場合が調査されずに破壊され、事後に現地を訪れるのが実情であった。その点からも今回の「下月隈宮ノ後遺跡」発掘調査の意義は大である。

ところで、周辺の遺跡であるが、まず当遺跡から南を見ると、約200m離れた、月隈丘陵から延びた一支丘の先端部に、弥生時代中期の甕棺墓地として知られる「上月隈遺跡^{注1}」があり、また目を北西に転じれば、約200m先に「下月隈天神森古墳群」のある天神森の岡が見える。一方、はるか南西には初期農耕集落遺跡として著名な「板付遺跡」が、さらに奥には奴国王の墓所といわれる「須玖岡本遺跡」等々が望まれる。

さて、当遺跡から、さほど離れぬ、同じ月隈内で、かつて鏡、銅鈴鉛范及び形態不明の青銅器片4点が伴伴出土したとの報告もある^{注2}。また、当遺跡近接地から棒状の青銅製品が崖面の甕棺の中と思われるところから出土したと聞く^{注3}。なお、金隈遺跡の発掘調査期間中に数基の甕棺墓が確認され、かつ石剣1本を副葬した石蓋土塚墓(?)が調査された月隈遺跡とは、当遺跡の東側隣接地であろうか。

注1 山崎純男「宝満尾遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第26集 1974年3月

注2 高橋健自「銅鈴銅剣の研究」聚精堂 1925年11月

注3 福岡市教育委員会文化課 横山邦雄氏よりご教示。

注4 折尾学「金隈遺跡第二次調査概報」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第17集 1971年3月

4 地形測量図

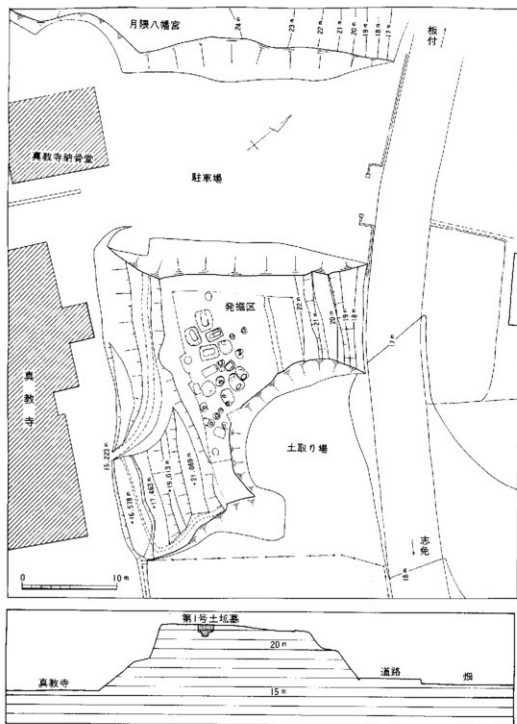


Fig. 1 地形測量図 (縮尺 1/400)



Fig.2 遺構全景

第II章 調査の記録

遺跡はかつて果樹園に利用されており、断面図でもわかるように斜面部は削平されて旧地形とは大きく異なっている。このため発掘区を斜面部は避け平坦部に設定した。先にも記したごとく平坦部の北東部は土取りですでになく、結局15.2×16.2mの範囲の発掘区となった。厚さ30cm程の表土を剥ぐとすぐに花崗岩のバイラン土が現われ、遺構はこの面に掘りこまれている。これまでに土塚墓7基と甕棺墓17基、性格不明の土塚5基を検出したが、現在なお調査を続行しており、土塚墓、甕棺墓ともにあと数基追加される可能性がある。土塚墓のうち第6号をのぞく6基はすべて二段掘である。甕棺墓は5基が成人用であり、12基が小児用である。第3号甕棺墓と第9号甕棺墓中には人骨が残存していることが確認されている。これまでの調査では副葬品はなく、また祭祀遺構や溝などの外部施設遺構は見られていない。

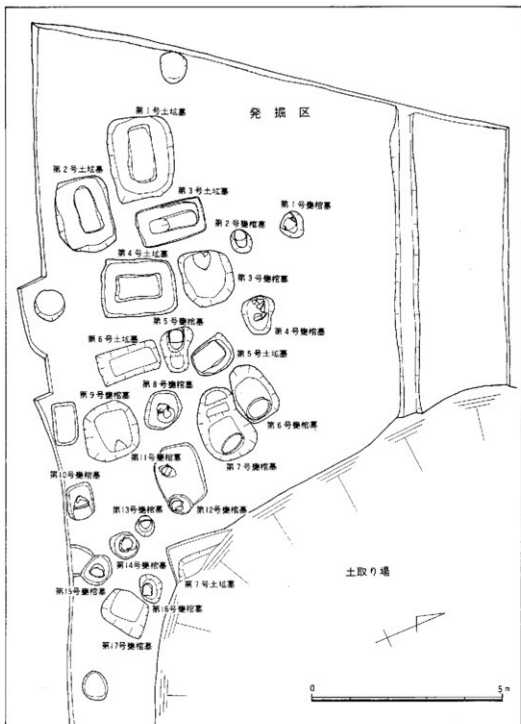


Fig. 3 寝棺墓・土坑墓配置図 (縮尺 1/100)

1. 変棺墓

第1号變棺墓

第2号變棺墓の北側約1.3mの所にあり、本遺跡ではもっとも北側に位置している。墓壇上面は直径約65cmの不整形形を呈し、さらに西南方向に斜めに掘られている。壇底はほぼ平坦をなし、上面からの深さは約60cmを計る。上部は削平されており、上棺はわずかにその一部を残すのみである。上棺は小型の甕、下棺は壺を用いた複棺である。下棺の壺は頸部より上を打ち欠いており、上棺の甕口縁部と合わせている。この部分には灰白色粘土が見られ目張りをしたものと思われる。

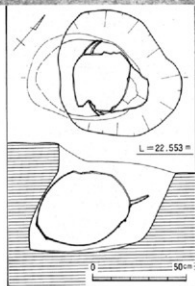
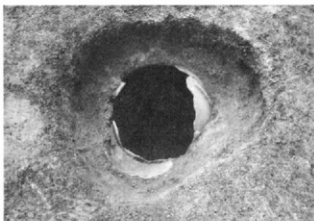


Fig. 4 第1号變棺墓



Fig. 5 第3号變棺墓

第3号變棺墓

第2号變棺墓と第4号土壇墓の間にある。墓壇は上面で約1.3mの隅丸方形で、80cm程の深さから西に向かって斜壇が掘られ下棺を埋置している。上・下棺とも甕で下棺は口縁下に1条、胴部に2条の凸帯を持つ大型甕が用いられている。人骨が残っている。

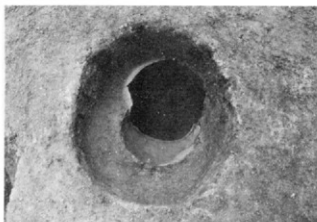
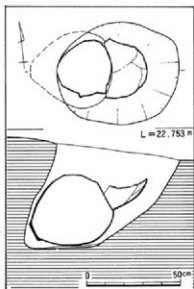


Fig. 6 第2号變棺墓

第2号變棺墓

第1・3号變棺墓と同じように西側に向かって墓壇が掘られている。墓壇上面形は65×55cmの楕円形で壇底までの深さは55cmを計る。第1号變棺墓と同じように上棺は小型の甕、下棺は壺の組み合わせである。壺は頸部より上部を打ち欠いており胴部には凸帯はない。また目張りの粘土も見られなかった。

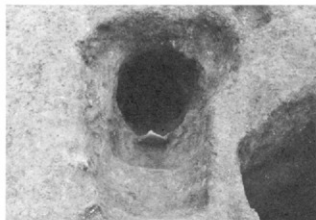


Fig. 7 第5号變棺墓

第5号變棺墓

第5号土壇墓と第6号土壇墓の間に位置している。墓壇は2.2×1.5mの不整長方形で西に向かって斜めに掘られている。上棺は甕を用いており、下棺は甕の複棺である。主軸はN-70°-Eで第1・2・3号變棺墓と同じような主軸をなし、下棺を丘陵の高い方に向けるという共通点がある。小児用變棺墓であろう。

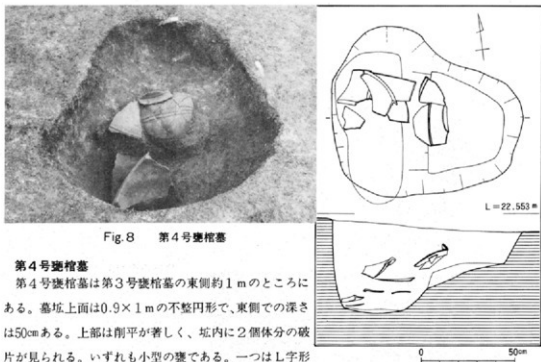


Fig.8 第4号変棺墓

第4号変棺墓

第4号変棺墓は第3号変棺墓の東側約1mのところにある。墓壇上面は 0.9×1 mの不整形形で、東側での深さは50cmある。上部は削平が著しく、壇内に2個体分の破片が見られる。いずれも小型の甕である。一つはL字形の口縁部を持ち、口縁下に1条、胴部に2条の凸帯をめぐらしており、外面には丹塗りを施している。もう一つの甕は、同じようにL字形の口縁であるが、胴部に凸帯はなく、口縁下のみに1条めぐらしている。これらは後世の破壊によって破片となったか、あるいはある種の蓋的な役目として破片が上に置かれたのかいずれも判然としない。

第6号変棺墓

第6号変棺墓は第7号変棺墓と並んで発見された。墓壇は第7号変棺墓の墓壇を切っており、第6号変棺墓が新しい時期に埋置されたことがわかる。墓壇は 1.5×1.1 mの東西に長い楕円形で、東に向かって斜めに掘られている。埋土上部には小型甕の破片が見られた。単棺で口縁部には目張り用の粘土が認められた。



Fig.9 第6号変棺墓



Fig. 10 第7号変棺墓

第7号変棺墓

第6号変棺墓の南側に接して埋置されている。墓壇は第6号変棺墓よりやや大きく、東に向かって階段状に傾斜をもって掘りこまれている。棺は大型の失蓋単棺で口縁部には目張り用の灰白色粘土が見られた。第7号変棺墓と同じように口縁部はT字形断面をなす。

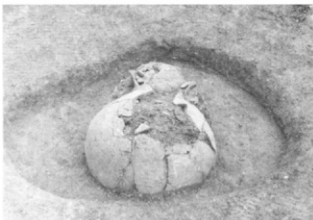


Fig. 11 第8号変棺墓

第8号変棺墓

第9号変棺墓の北側に接近して埋置されている。上面形は方形をなし墓壇は浅く、表土直下で発見された。下棺の壺に鉢をかぶせた複棺である。下棺の壺は、球形の胴部に外反する頭部がつき、口縁部上面はほぼ平坦となっている。胴部に凸帯は見られない。



Fig. 12 第9号変棺墓

第9号変棺墓

墓壇は上面で1.3×1.5 mの長方形でほぼ垂直に掘られ、さらに東に向かって棺を挿入する斜壇が掘られている。下棺は中型甕で、上棺は甕が用いられている。この二つの甕は接口ではなく、上棺を下棺に挿入する方法をとっている。人骨が残っており、その保存状態はよい。

第10号瘞棺墓

第10号瘞棺墓は発掘区の南端線に接して発見された。墓壇は0.7×1 mの長方形で垂直に掘られ、下棺を埋置するためさらに東側に斜壇が掘られている。下棺はく字形断面の口縁部を持つ甕で口縁下に三角形凸帯を1条めぐらす。上棺は頸部上半を打ち欠いた壺を用いており、下棺に挿入している。



Fig. 13 第10号瘞棺墓

第11号瘞棺墓

第11号瘞棺墓と第12号瘞棺墓とは同じ墓壇内に埋置されているかのようなのであるが、墓壇周縁にある第12号瘞棺墓が破壊されていないことから第11号瘞棺墓が時期的に早いことになる。小型甕の複棺で上棺を挿入する方法をとっている。小児用瘞棺墓である。



Fig. 14 第11号瘞棺墓

第12号瘞棺墓

第11号瘞棺墓の墓壇を切っている。上部は削平され原形を知りえないが複棺であろう。下棺は胴部に丸みのある甕が用いられている。第12号瘞棺墓と同じように小児用瘞棺墓である。第11号瘞棺墓の墓壇は小児用瘞棺墓としては大きく、また第6・7号瘞棺墓の墓壇と類似しており、下部にはもう1基瘞棺墓が存在していると思われる。



Fig. 15 第11・12号瘞棺墓



Fig. 16 第13号甕棺墓



Fig. 17 第14号甕棺墓



Fig. 18 第15号甕棺墓

第13号甕棺墓

第13号甕棺墓は、第12号甕棺墓と第14号甕棺墓の間にあり、発掘区では南端の小群に位置している。墓壇は径50cmの円形で、小型甕2個の接口式甕棺墓である。上棺の甕は、L字形の口縁部を持ち口縁下に1条、胴部に2条の凸帯をめぐらしている。

第14号甕棺墓

第13号甕棺墓と同じように小児用甕棺墓である。墓壇は径70cmの不整円形を呈している。上棺は破片となっており全形を知りえないが甕であろう。下棺も甕が用いられている。甕は胴部に丸みを持っており、口縁部はく字形の断面をなし、口縁下に1条の凸帯がめぐっている。

第15号甕棺墓

第15号甕棺墓は第14号甕棺墓の南側に位置している。墓壇は70×80cmの楕円形である。下棺の甕のみが検出されたが、かなり削平されているため上棺が存在していたかは判然としない。甕は口縁部を南東側に向け、傾斜して埋置されている。口縁部の断面はく字形で、口縁直下に凸帯をめぐらしている。

第16号壺棺墓

第17号壺棺墓とともに発掘区の南端部に位置する。現在は下棺の壺だけであるが第1号壺棺墓と同じように頭部上半を打ち欠いているから複棺をなしていたのであろう。やや小さいが同じ形態をなす。

第17号壺棺墓

第16号壺棺墓の下部より発見された。第9号壺棺墓と同じような墓壇に大型の壺が斜めに埋置されている。



Fig.19 第16号壺棺墓

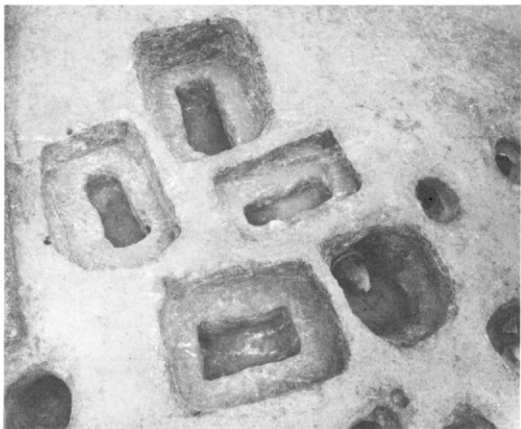


Fig.20 土坑墓群

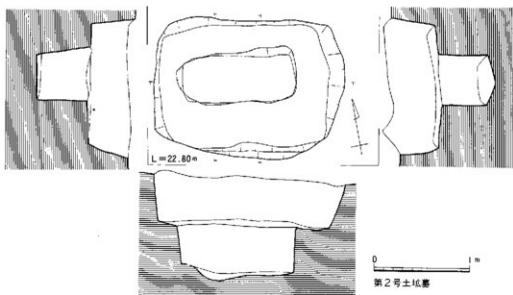
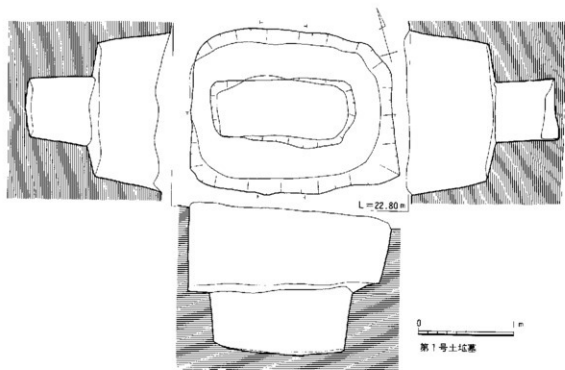


Fig.21 第1・2号土坑墓实测图 (缩尺 1/40)

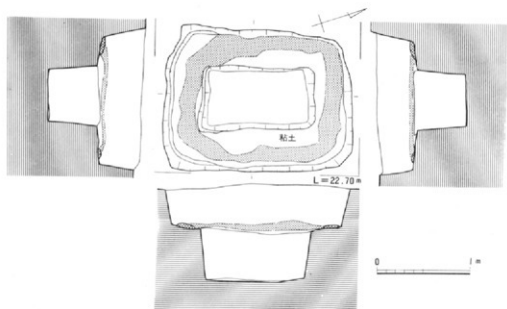


Fig.22 第4号土坑墓平面图 (顺尺 1/40)



Fig.23 第3号土坑墓

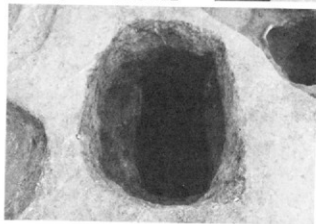


Fig.24 第5号土坑墓

2. 土 坑 墓

第1号土坑墓 第1号土坑墓は発掘区の西端部に位置している。7基ある土坑墓の中で東西方向の主軸をもつのは第1号土坑墓と第2号土坑墓の2基のみである。土坑は二段掘りで上端より90cmの深さから二段目の埋葬部を掘りこんでいる。

第2号土坑墓 同じように二段掘りの土坑墓である。二段目は上端より55cmの深さから掘りこまれているが、やや北側に寄っている。頭位は第1号土坑墓と同じように東向きであろう。

第3号土坑墓 第3号～7号土坑墓は南北方向の主軸である。二段目埋葬部の掘りこみは約25cmと浅い。坑底は平坦をなさず南側に向け傾斜して掘られている。

第4号土坑墓 もっとも整然とした形をなす土坑墓である。二段目の平坦部には灰白色の粘土が8cm程の厚さでめぐっており、蓋の目張り用と考えられる。

第5号土坑墓 二段掘りの土坑墓ではあるが、南側短辺はほぼ垂直な壁をなしている。上端より坑底までの深さは1.2mとかなり深い。小児用の土坑墓であろう。

第6号土坑墓 第5号墓の南側に位置する。素掘りの土坑墓で、上辺は長辺が1.6m、短辺が0.8mの長方形である。

第7号土坑墓 土取りの崖面より発見されたもので二段掘りの土坑墓である。他の土坑墓の一段目の深さが0.5～1.5mあるのに対し、5cmときわめて浅い。

土 坑 墓 計 測 表

(単位 cm)

No.	方位	平面形	長×幅・深さ	No.	方位	平面形	長×幅・深さ
1	N-74°-W	隅丸長方形	220×170 150	5	N-17°-W	隅丸長方形	115× 85 125
2	N-80°-W	隅丸長方形	200×150 110	6	N- 9°-E	長 方 形	160× 80 95
3	N- 9°-E	長 方 形	180×100 75	7	N-10°-E	長 方 形	180×100 75
4	N-19°-E	長 方 形	200×150 115				

第Ⅲ章 ま と め

本遺跡は、東から西へびる長さ約300mの小丘陵上にあり、これまでの竊棺出土地点からみて、本来は丘陵上が墓域となっていたものと思われる。今回の発掘区はその一部にすぎず、さらに発掘途中にあり墓域の全容については本報告に記したい。竊棺・土坑墓の時期であるが、両者の切り合いはなく時期差があるかは明確にできない。竊棺墓の時期であるが、第3・6・7号竊棺は、口縁断面形がいわゆる須玖式のT字状口縁の内唇部が退化し、く字状の立岩式に近い形状をなしている。弥生時代中期後半のものが多いようである。



福岡市博多区
下月隈宮ノ後遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第61集

©1980年3月31日発行

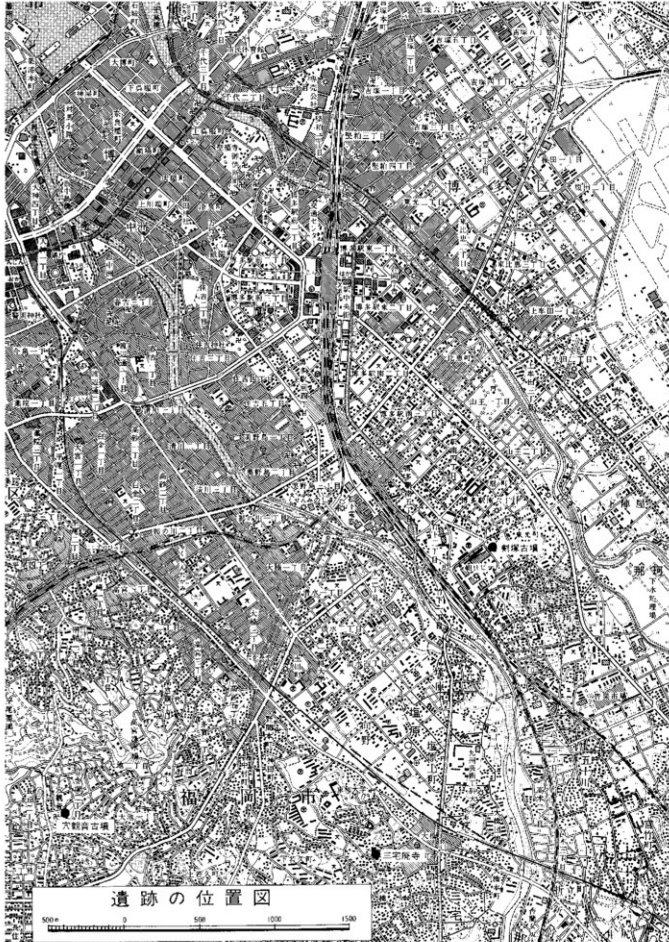
発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目7-23

電話 (福岡) 711-4667(文化課)

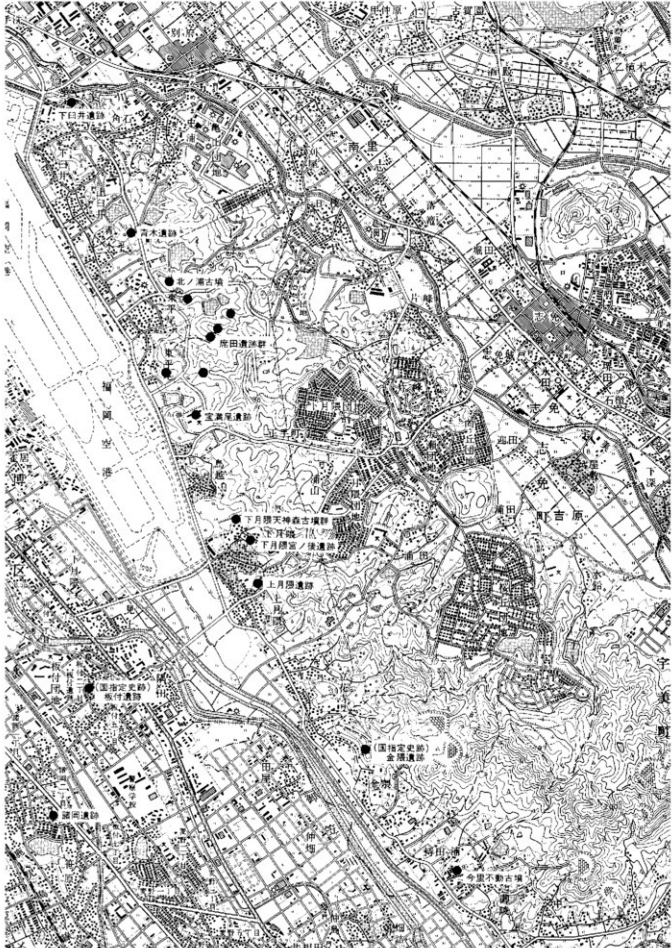
印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

1548



遺跡の位置図

500m 0 500 1000 1500



the 1990s, the number of people aged 65 and over in the United States is projected to increase from 20 million to 35 million (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 65 and over increases, the number of people aged 75 and over is also expected to increase. The number of people aged 75 and over in the United States is projected to increase from 10 million in 1990 to 15 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 75 and over increases, the number of people aged 85 and over is also expected to increase.

The number of people aged 85 and over in the United States is projected to increase from 3 million in 1990 to 5 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 85 and over increases, the number of people aged 95 and over is also expected to increase.

The number of people aged 95 and over in the United States is projected to increase from 1 million in 1990 to 2 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 95 and over increases, the number of people aged 100 and over is also expected to increase.

The number of people aged 100 and over in the United States is projected to increase from 0.5 million in 1990 to 1 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 100 and over increases, the number of people aged 105 and over is also expected to increase.

The number of people aged 105 and over in the United States is projected to increase from 0.2 million in 1990 to 0.5 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 105 and over increases, the number of people aged 110 and over is also expected to increase.

The number of people aged 110 and over in the United States is projected to increase from 0.1 million in 1990 to 0.2 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 110 and over increases, the number of people aged 115 and over is also expected to increase.

The number of people aged 115 and over in the United States is projected to increase from 0.05 million in 1990 to 0.1 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 115 and over increases, the number of people aged 120 and over is also expected to increase.

The number of people aged 120 and over in the United States is projected to increase from 0.02 million in 1990 to 0.05 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 120 and over increases, the number of people aged 125 and over is also expected to increase.

The number of people aged 125 and over in the United States is projected to increase from 0.01 million in 1990 to 0.02 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 125 and over increases, the number of people aged 130 and over is also expected to increase.

The number of people aged 130 and over in the United States is projected to increase from 0.005 million in 1990 to 0.01 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 130 and over increases, the number of people aged 135 and over is also expected to increase.

The number of people aged 135 and over in the United States is projected to increase from 0.002 million in 1990 to 0.005 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 135 and over increases, the number of people aged 140 and over is also expected to increase.

The number of people aged 140 and over in the United States is projected to increase from 0.001 million in 1990 to 0.002 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 140 and over increases, the number of people aged 145 and over is also expected to increase.

The number of people aged 145 and over in the United States is projected to increase from 0.0005 million in 1990 to 0.001 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).

As the number of people aged 145 and over increases, the number of people aged 150 and over is also expected to increase.

The number of people aged 150 and over in the United States is projected to increase from 0.0002 million in 1990 to 0.0005 million in 2000 (U.S. Census Bureau 1996).